

ニュースレター vol.4

会員の皆様へ

このニュースレターは、会員相互の情報交換を目的に、会の活動内容とともに会員個人の様々な活動などについてお知らせするものです。

今回は、6月に開催される総会等に関するお知らせと、本会幹事の木村貞彦さんによるエッセイをお届けします。木村さんは、商社勤務の中で体験した英語にまつわる楽しいお話をご披露くださっています。どうぞ、お楽しみください。

会員からの記事を募集します。個人の活動内容、エッセイなど、ニュースレターに載せたい記事がありましたら、奮ってご応募ください。

お知らせ

1. 中央大学講座への講師派遣

昨年に引き続き、白門技術士会から中央大学の講座「科学技術と倫理」の講師を派遣します。今年は木村さんと小林さんのお二人が担当します。テーマは下記のとおりです。

6月10日 木村貞彦 「3次産業 - 特に商社での技術者倫理 - 」

6月17日 小林 進 「情報技術と倫理 - ITの光と影 - 」

2. 白門技術士会定時総会

メーリングリストでお知らせしたとおり、6月21日(土)に中央大学理工学部後楽園キャンパスにて2008年度の定時総会を行います。懐かしい母校での開催です。是非、ご出席ください。

エッセイ

「英語の色々」: 木村貞彦

技術にはあまり関係ない話で恐縮ですが、一貫した商社勤めの中で経験した英語に係る話を紹介します。

はじめての海外勤務

初めて海外に行ったのは25歳のとき。昭和29年(1954)に、勤務していた浅野物産という会社が米国ペンシルバニア州の Catasauqua (フィラデルフィアの郊外にあるインデ

イアン語で清らかな水という意味である由)と言う片田舎にある Fuller 社というセメント製造関連機器メーカーの輸入総代理店となっていたことから、Sales Engineer の教育を受けるため、それより数年前に米国の管轄下にあった日本の貿易が当時の通産省の管轄に移され、外貨割当制度により機械の輸入が或る程度自由化され、暫く製品の輸入販売を行って来たのを技術提携によって国産化しようとする準備段階に入ったことから、担当として機会に恵まれたのでした。

出発は6月の早朝、羽田空港からでパンアメの4発のダグラス機でサイパン、ウエーキ、ホノルルで給油し、曆の上で翌日の夕方サンフランシスコに到着し、一泊してオマハ、シカゴ経由でニューヨークに48時間ほどで着いたと記憶しています。中央(高専)を卒業してから半年ほど有楽町駅前にあった進駐軍相手の模型屋でアルバイトをしたことから、戦時下の中学で教わったよりは多少ましな程度の英会話の知識しか持ち合わせなかったし、さらに、あがっていたのでしょうか、初めての飛行機搭乗でもあり金髪の若い(?)スチュワーデスのコーヒーサービスに、「熱いの?」、「冷たいの?」、やれ砂糖は、ミルクは?との連発の質問がよく聞き取れず、大汗をかいたのも懐かしい思い出です。空港の待合室は進駐軍と共用で、鉄板の蒲鉾兵舎を改造した物でした。

略4ヶ月の教育を受け、帰国後国産化された Fuller 社の機器(セメント焼成クリンカーの急冷と熱回収の装置と AirSlide と呼んでいたコンベアー)の販売を担当し、クリンカー急冷機は100台以上の実績を上げ、市場が少なくなり次に New York 支店勤務を命じられたのが5年後で、3年と少々滞在しましたが、思い出すと本当に色々な体験をしました。

会話の中での否定と肯定

“Don't you think so do you?” と “Do you think so don't you?” との違いに、はじめは面食らいました。同意していても No と否定して良いのか、Yes と肯定して良いのか、会話の途中で考え込んでしまいます。同様な当方の意見を求める文句が会話の中で時々あり、日本人は良く Yes と No を間違えるのですが、色々で現地人に正しい返事のしかたの説明を求めましたけれど、その時のニュアンスでと言われましたが其れが上手くつかめません。取引の上での会話でしたら問題を残しますので、結局私の結論は、“Yes I think so” とか “No I don't think so” とか相手の質問の前半部をなぞらえて回答するのが此方の意見を正しく伝えられると思っていますが、未だに正しいのかどうか確信がありません。

画鋸、虫ピンと安全ピン

駐在中の土日は結構暇をもてあます事があったので、ソリッドモデルを作ろうと思い立ち、事務所の近くにあった玩具店で、戦時中に追い回された苦い思い出のある P-51(ノースロップムスタング戦闘機)のキットを買い求めて始めたのです。近頃の良く出来た

プラモデルキットとは異なり、糸鋸で切り離された木片のキットで、小瓶のラッカー塗料のほか紙やすりまでは付いていましたが、小刀や筆までは付かず、GEM という背付きのかみそり刃で切削したのです。さて、仕上がりになってプロペラ軸に虫ピンが必要な事がわかり、近所の文具屋に行き、ついでに画鋏と安全ピンも欲しくて、まずは画鋏をと直訳で Picture pin と言ったのですが全く通じません。鋏は釘かなと思い nail と言い直して見てもアウト。仕方なく紙に絵を描いたところ、“ Oh ! thumbtack ” と来ました。中学で聞いたことが有ったなと思い出しながら次に虫ピンを蝶などの昆虫採集に使ったことから “ Insect pin ” と言ったのですが、これまた通じない。仕方なく再び絵を描いたところ、“ Dresser s pin ” との事。日本で言うところの待ち針で裁縫に使うからだそうです。最後の安全ピンは “ Safety pin ” で良いと思ったのですが、念のため初めから絵を描いて見せたところ、“ Oh yes, it s Safety Pin ” と来ました。何となく面白くない気分だったのですが、最後に “ お前は絵が上手だね、絵描きかね？ ” と言われ納得。多少は気分が晴れました。その時作った P-51 は、その後の数回の引越しで紛失してしまったのを今になって悔やんでいます。

女性英語

フランス語などと異なり、英語には女性、男性の用語の区別はないと聞いていたのですが、NY 支店で秘書として付けてもらったのが Jone Toctaman という名のドイツ系ユダヤ人の 19 歳の小柄なプラチナブロンドで、セクレタリースクールを出たばかり。彼女の役目は私の電話番と、発信する商業レターを清書する事。とても気さくで良く働いてくれましたが、困った事には合衆国の認めた祝日に加えてユダヤ教の祝日と言って勝手な日に休暇を取る事。真摯なユダヤ教徒でした。まだ其の頃はテープレコーダーがなく、手紙はエジソンの作った蝋管レコードに似た口述用レコーダーを与えられていましたが、発音に自信が無いので手紙は一応走り書きの原稿を渡していました。一月ほどして彼女から「あなたの英語の先生は女性であったか？」との質問が有り、どうしてと聞くと「どうもあなたの文章は女性的だから」と言われました。原稿は大幅に単純化され訂正されたので、それ以後は心して簡素と言うより乱暴な英文原稿を渡すようにしたのですが、今でも何処が違うのか判らずあまり直っていない様に思います。因みに、その後帰国して中学の同窓会で英語担当の旧師にお目にかかった時、其の話をしたところ、「確かにそうかもしれない。自分の先生は女性だったからな」と言われました。

余談になりますが、彼女の家族はヒトラーによる迫害を逃れ米国に来た由。結婚式の際に我々夫婦も呼んでくれ、絶対に異教徒は入れないユダヤ教会に特別に入れてくれました。ユダヤ教の聖者の中に 2 名の日本人が居る由です。一人は満州に共産主義者(赤系ロシア軍)に追われて逃げ込んだ白系ロシア人を保護し助けた陸軍の軍人。もう一人は名を失念しましたが、有名な北海に面するエストニアの日本公使で、日本政府の命令を無視し数千人のユダヤ人に亡命用のビザを発行した由。その事も教会が OK した理由

の一つでしょう。彼女とは未だに年賀カードを取り交わしています----ユダヤ教徒はキリスト生誕を祝わないのでXマスカードは使えません。

わずらわしい公用英語

勤務会社の社名が丸紅と変わり次にロンドン勤務となった時に気が付いたのは、米国では Gentlemen で始める商業文を、Dear Sirs で始めるのが普通で、Gentlemen はほとんど使われない事です(勿論米国でもある程度親しくなると Dear xxxxx と名前を入れ呼びかけますが。)

ロンドンでの秘書はベテランのお姉さんで、自己紹介によるとロンドン下町育ちの Cockney (Cockney) 。つまり江戸っ子の様に純粹のロンドン子と胸を張っていましたが、困った事に凄く早口。べらんめえ調子と言うのでしょうか、時々下町言葉を使うので、慣れるまで苦労しました。或る日、子会社の事務所兼倉庫をロンドン郊外に開設した際の開所式に、その町の町長を来賓として招待するための招待状を依頼したところ、清書する時になって問題としたのが Dear Sirs の書き出しで良いか？否か？と言う事。日本人の私にはそんな事判る筈ないので、彼女自身で調べろと言ったところ、Her Majesty から始める “女王に任命された町長・・・” とか長ったらしく七面倒なタイトルが必要だとか何とか言って大騒ぎで方々に電話していましたが、結局良く判らず Your Excellency で誤魔化したと記憶しています。幸いにちゃんと町長は出席してくれましたが、果たしてそれで良かったのかどうか未だに不明です。

標準英語/Queen's English?

ロンドンでの秘書に古株の一人では足りないので、新人を募集したところ、推薦されたのがスコットランド出身の女性。履歴書を見ると師範学校を出て中等学校の語学教師免許を持っているとの事で、古株のお姉さん秘書に「ついでに英会話を習おうかな」ともらしたところ、猛烈な勢いで反対されました。理由は「スコットランド訛り」が入るからとの事。ロンドン周辺の所謂イングランド人はなぜかスコットランド人やアイルランド人を軽蔑するのです。歴史的な理由の様ですが、今の女王はスコットランド、アバデーンの城主という事になって居るのにこの点もなぜか判りません。何れも外見では全く見分けが付きませぬのに。

半分自慢話になりますが、数年前に横浜にある英国原子力公社事務所の代表と所用で面談した時、最後に、「日本に来て5年になるが初めて正確な英語を話す日本人に会った」と言われ、「英国での学校は？」と質問されました。お世辞と思いましたがNYとロンドンに数年駐在しただけと答え、更に厚かましく Queen's English になっているかと聞いたところ、もう少しとの返事。残念でした。

英語と米語

前の話しにあまり関係ない事ですが、英国より東京に戻り与えられた部署に、浅野時代から私を良く面倒を見てくれた方で早くに故人となった方の息子が、ロンドン公立高校からロンドン大学を出て丸紅に入社し偶然配属されて来たのですが、直接の上司である先輩部長が取引上大切なさる米国企業の幹部に何かの祝い文を送るため彼に英訳を依頼したところ、「『英語にしますか？米語にしますか？』と言われ面食らったよ」と言って笑っていました。この上司は在米7年で勿論英語に堪能な部長であったのですが、小生にはまだ英米語の違いを正確には掴めないのであまり笑えない話と思って居ます。恐らく彼が私の英米ごちゃ混ぜの英作文を見たら笑うでしょう。

以上英語について取りとめも無いこと書きましたがご笑話としてお読下さい。

(編集：白門技術士会広報部会)